

地理的・歴史的分野に「溶け込ませた」 金融教育の実践

金融教育の現場レポート

「金融教育」は、社会の中で生きる力を育むことを目的として行われる教育です。このコーナーでは、金融教育の授業がどのように進められているか、教育現場に立つ先生や、授業を受ける生徒の姿をレポートします。

今回は、京都府京都市立伏見中学校教諭・奥村光太郎先生が、ふだんの授業の中で地理や歴史の単元に絡めて金融教育に取り組んできた実践についてご紹介します。

※奥村先生はこのレポートで紹介されている実践をまとめた小論文で、金融広報中央委員会主催「第9回金融教育に関する小論文・実践報告コンクール」(2012年)「実践報告部門」優秀賞を受賞されました。

自らの社会経験から 金融教育の重要性を実感

奥村先生は京都市の中学校社会科教諭として長年、地理・歴史・公民・道徳の指導に携っています。先生は、教員になる以前の6年間、国民金融公庫(現日本政策金融公庫)に勤務していた貴重な経験の持ち主です。その経験をもとに、地理や歴史の授業であっても、金融の基礎知識やその時代の金融問題を織り交ぜて授業を展開するのが、ここ20年以上もの奥村流の金融教育実践スタイルとなっています。

先生が日常的に金融問題を織り交ぜて授業を展開するのは、国民金融公庫で働いていた時代から、顧客の人たちの金銭トラブルを目の当たりにしたり、安易に他人の連帯保証人になって

後から苦勞をしている知人を見るなど、金融の知識の大切さを日々実感した経験がベースになっています。「どこかでしっかりとした金融知識を学んでおくべきだ」という強い課題意識を持

ち、「金融機関での経験をもとに、消費者教育を発展させる形で中学生向けの授業ができないか」と考え、これまでさまざまな授業を通じて実践を積み重ねてきました。



京都府
京都市立伏見中学校
奥村光太郎教諭

授業に「溶け込ませる」のが 奥村流

中学校における金融教育を社会科で実施する際には、3年生の公民の授業で行われることが一般的でしょう。

しかし、奥村先生の場合には、1、2年生で学ぶ地理・歴史分野の学習にも積極的に金融教育を取り入れているのが大きな特徴です（表1・2）。例えば、地理の学習では、「なぜ『100円シヨップ』の商品は安いのか?」「日本はなぜ大量の農産物を輸入しているのだろうか?」などがテーマになります。歴史の学習では、シルクロードを学ぶ際に「分業と交換」を、また小判の学習に関連づけて「江戸時代の経済」を学んでいます。しかも、それぞれのテーマは時間をかけた「特設授業」ではなく、各授業の導入の部分などを利用し、関連知識として「溶け込ませる」形でカリキュラムに組み込んでいるのです。

「授業では『昔の人の商売について考えてみよう』と問いかけます。生徒たちは『商売』をキーワードにすると明らかに関心が高まり、授業の展開にも弾みがつき、理解も深まりやすくなります」と奥村先生は言います。

また、マルコ・ポーロが東方見聞録

で日本を「黄金の国・ジパング」と表現したのはなぜか。生徒たちは「シルクロードを経て正倉院に納められた輸入品は『黄金』で支払いが行われたのではないか。それに尾ひれがついた話として、そのような表現になったのではないか」と議論を發展させたといいます。「マルコ・ポーロの生きた時代と正倉院に御物が納められた時代とはギャップがありますが、もっと深く調べてみたい気持ちにもなるでしょうし、そのような発想が出てくるのが興味深いと思います」と奥村先生は授業の成果のひとつとして実感しています。

深まる3年公民の授業と 理解

1、2年の地理、歴史で金融知識を蓄えてきた生徒たちは、3年の公民で経済を学ぶときには非常に理解が早く、知識だけでなく基礎的な考える力が育まれていると、奥村先生は感じています。

例えば、「前知識もなく、いきなり『需要と供給』の話にしても理解しにくいのですが、『なぜ安いんだろう?』『なぜ高くなるのか?』から始まり、『時期によって旅行代金が変わるのは?』という質問にも、『需要と供給のバランスでしょ!』と理解できる。

あるいは、『なぜ外国の方が日本の物より安いのか?』と問いかければ、『土地が広いから日本より安く作れる!』という具合に、ぼんぼん返事があるのです」と話します。

また、「悪徳商法」の指導などでは、「こんな悪徳商法がある」と具体例を教えておけば社会でも通用するだろうという考え方もあるかもしれませんが。しかし、個別具体的な事例を知っているだけでは、新しい悪徳商法には対処できない場合が出てきてしまいます。具体例だけではなく、金融や経済に対する基本的な知識が身に付いている生徒は、新手の手法にも、一瞬にして問題点を指摘することができるのだといえます。これが、奥村先生が目指す「金融教育によって一般的な知識を育むことで、どんな事例に出くわしても対処できる応用力を身に付ける『生きる力を育む』という教育につながっています。

また、奥村先生は、生徒達が想像以上に金融教育に興味・関心を示したことに着目しています。「お金を稼ぐとは何か」という意識が働く、自然と人間の意欲は高まるのではないかと分析しており、「その興味・関心の芽を育む意味でも、中学生段階から金融教育に取り組むべきです。生徒

たちの人生を長いスパンで考え、その人生を豊かにするためにも、人生で失敗しないためにも、金融教育は必要です」と強調しています。

金融教育をさらに発展させて考える力を

奥村先生は、日本道徳性発達実践学会、京都市中学校教育研究会などで役員を務めるなど、校外活動にも長年精力的に取り組んでおり、同志社大学の篠原総一教授の監修による『ゲームで学ぶ経済のしくみ2 家計のしくみ』（学研教育出版）などでは教材開発の力量も発揮しています。

また、今後も奥村先生らしい新しい切り口で、さまざまな「地理・歴史・公民を関連付けた授業実践」を構想中。道徳教育にも力を入れていることから、「経済道徳・金融道徳」といったカテゴリーに挑戦する準備もしているといえます。

「昨今、大学では、経済を道徳的な視点から考える」という授業が試行的に行われています。そこで例えば、中学生なら『米騒動』を例にあげると面白そうです。『買い占め・売り惜しみ』は米の価格を釣り上げてお金を儲けようとするやり方ですが、主食の米を価格が高騰するまで市場に出

表2 指導計画書
(2) 歴史的分野指導計画

【テーマ歴史Ⅱ】「交換手段」の誕生	
【問い】	<ul style="list-style-type: none"> ・ 買い物をする時、もし貨幣（お金）というものがなかったらどうなるかを考えさせる。 ・ 私たちは日常生活で必要なものはほぼ全量を家庭外から買い入れている。 ・ したがって、もし貨幣がなかったら、私たちは明日から生きていけないということにもなりかねない。
【指導の要点】	<ul style="list-style-type: none"> ・ 貨幣が発明された時期と場所、そして考え出されるに至った経過を問う。 ・ 統一的な貨幣の使用は、紀元前221年（今から約2200年前）に中国の秦において、秦の始皇帝によって始められた。 ・ 貨幣が広く流通するためには、貨幣に「価値の裏付け」が必要である。 ・ なぜならば、貨幣と交換対象の物品が同価値であるということが保証されなければならないからである。 ・ 秦の始皇帝はものさし・ます・はかり・貨幣・文字を統一したが、これは始皇帝が強大な権力をもっていただからである。 ・ その権力によって交換価値の同等性が保証されたのである。
【テーマ歴史Ⅲ】国際的な分業と交換～シルクロードを手がかりに～	
【問い】	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「分業と交換」が行われる範囲は近隣地域から少しずつ遠くへ拡大していった。 ・ そして天平時代、つまり約1200年前にはユーラシア大陸を横切ってアジアとヨーロッパを結ぶまでに広がっていた。 ・ このルートをシルクロードといい、その東端は奈良の正倉院であるといわれている。 ・ それではシルクロードはなぜ成立したのだろう。また、どのようなものが日本に伝わってきたのだろう。 ・ 正倉院に残る宝物を手がかりにして考えることを問う。
【指導の要点】	<ul style="list-style-type: none"> ・ 歴史教科書には正倉院が所蔵する様々な宝物が掲載されている。これらの宝物は中国やインド、西アジアでつくられたものである。 ・ このことは、日本にはこれらの品物を制作する技術はなく、輸入していたことを示している。 ・ シルクロードは文化の伝達という側面が目されるが、結局これは経済的利益を追求する「分業と交換」を目的としたものである。 ・ 馬やらくだといった交通手段しかない時代にこれほどのことが行われたということは、そこに莫大な利益を得るチャンスがあったということの意味している。 ・ シルクロードは大きな利益をあげたいという人間利益を得るチャンスがあったということの意味している。 ・ この当時、シルクロードを経由してこれらの物品が日本にまで届けられるということは、日本が国際分業の仕組みの中に含まれており、高い価値の交換手段をもっていたことを示している。 ・ 高い価値の交換手段であるが、恐らくこれは「金」であったと推定される。なぜならば「金」はアジアでもヨーロッパでも普遍的な価値をもっており、大仏造営時の様子でわかるように当時の日本には「金」を集める力があつたからである。
【テーマ歴史Ⅳ】日本の庶民階層における交換手段の発達～鎌倉時代の人々の暮らしを手がかりに～	
【問い】	<ul style="list-style-type: none"> ・ 鎌倉時代には「貴族」「武士」「農民」の身分はほぼ固定していた。このことは、当時の日本は安定した分業体制と交換手段を成立させていたことを示している。そして分業体制と交換手段が成立していたということは、生産能力も高まっていたと考えられる。 ・ 当時の分業体制と交換手段と生産の様子はどのようなものであったのかを問う。
【指導の要点】	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「市のにぎわい」を参照させる。 ・ 市は多くの人でにぎわっており、質的に高い商品が大量に売られていたと推定される。 ・ このような市が成立するということは、信用性の高い貨幣があつたということの意味している。 ・ 「宋銭」から、当時の日本では中国（宋）の貨幣の信用が高かったことがわかる。 ・ 「高利貸し」を参照させる。このことから、当時、いわゆる「金融業」が成立していたことがわかる。
【テーマ歴史Ⅵ】小判の改鑄から見える江戸時代の経済	
【問い】	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「小判の重さと質の変化」を参照させる。 ・ 慶長小判→元禄小判→天保小判→万延小判と小判に含まれる金の含有量が減少していることに注目させる。 ・ それでは、なぜ小判の質が低下したのだろう。また、このことでなぜ物価が高騰したのだろうか。この2点を問う。 ・ 金の含有量が減るといことは、小判の価値が減少するということである。
【指導の要点】	<ul style="list-style-type: none"> ・ 例えば、17.9グラムの慶長小判の金の含有量は約84%だから、実質15グラムの金が含まれているということになる。 ・ つまり、この小判で15グラムの金に相当するものが買えるということになる。 ・ しかし3.3グラムの万延小判の金の含有量は約57%だから、この小判では約1.88グラムの金に相当するものしか買えないということになる。 ・ したがって、慶長小判なら1両で買えるものであっても、万延小判なら9.5両なければ買えないということになる。 ・ そこで物価が大幅に上昇するということになるのである。



さないとというのは倫理的にはどうでしょうか？ぜひ、生徒たちの意見を聞いてみたいと思います」。中学校でも経済道徳を独自のスタイルで取り上げていきたいと話しています。

多忙だからこそ、ふだんの授業に「溶け込ませる」スタイルで、20年以上も実践を重ねてきた奥村先生。「どの内容に、どういう意図を持って導入するか」といった念入りの事前準備は必要ですが、多くの先生に参考になる点も多いのではないのでしょうか。

表1 指導計画書
(1) 地理的分野指導計画

【テーマ地理Ⅰ】なぜ「100円ショップ」の商品は安いのか	
【問い】	<ul style="list-style-type: none"> ・いわゆる「100円」ショップで売られている製品の大半は中国など外国製である。 ・同じ種類の商品でも、日本製と比べると大変安いので、私たちは100円ショップで多くの商品を購入している。 ・それでは、なぜ中国では安価に商品を作ることができるのだろうか。
【指導の要点】	<ul style="list-style-type: none"> ・「人件費」に注目させる。 ・教科書記載のグラフ「各国の賃金の格差」に注目させる。 ・日本の1ヶ月あたり平均賃金は約29万円であるが、中国は3万円弱なので日本の10分の1ということになる。 ・中国の国民がこの賃金で生活できるということは、その他の資材等についても日本より安価に調達できると考えられる。 ・そこで日本よりも安い価格で製品を製造できるということになる。 ・市場では当然のこととしてより安価な商品やサービスが選好される。 ・このことから、「国際的な分業」として中国で100円ショップの商品が大量に生産され、日本の消費者によって購入されるのである。
【テーマ地理Ⅱ】日本はなぜ大量の農産物を輸入しているのだろうか	
【問い】	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の食料自給率は39%といわれている。つまり日本は多くの農産物を輸入に頼っているのである。 ・このことは、日本は独力で自国の国民に食料を提供できないことを示している。 ・日本のような国が飢えに苦しまないのは、大量の食料品を輸出できる国があることを示している。 ・このことから「なぜ他国に供給する余裕のある国があるのか」ということと「なぜ日本はどのように大量の食料品を輸入しているのだろうか」という2点を問う。
【指導の要点】	<ul style="list-style-type: none"> ・「地理のポイント」には「広い土地で機械を使って大規模に穀物を栽培すると、生産にかかる費用が安くなります。そのため、出荷するさいの価格が低くなり、輸出に有利になります」という記述がある。ここから大規模農業のメリットと日本でなぜ大規模農業が困難なのかを考えさせ、アメリカと比べて国土が狭いことに注目させる。 ・「アメリカ合衆国とカナダのおもな農業地域」「大規模な牛の飼育場」「輸出される小麦」を使用して両国の農業の規模の大きさを実感させる。 ・「アメリカ合衆国とカナダの農産物の生産量に占める輸出量の割合」を利用して両国の輸出余力について説明する。 ・「日本のおもな農産物の輸入先」を利用して、日本の食料は農産物の国際的な分業体制によって支えられていることを理解させる。
【テーマ地理Ⅲ】北海道の農業の特徴を考える	
【問い】	<ul style="list-style-type: none"> ・「おもな農産物の生産量に占める北海道の割合」。 ・すると北海道には生産量が全国一という農産物がたくさんある（てんさい＝100%、あずき＝88.1%など）。 ・ではなぜ北海道には全国一の農産物がたくさんあるのだろうか。その理由を問う。
【指導の要点】	<ul style="list-style-type: none"> ・写真「十勝平野の畑作」。 ・広大な北海道では、本州と違って大規模な畑をつくることができる。 ・また、気候が亜寒帯なので、「適地適作」という観点から見ると温帯である本州とは異なる作物の育成が適している。 ・つまり、やや低い温度に対応できる作物の生産に適しているのである。 ・北海道は日本全体の気候条件にもとづいた分業体制と機械化がすすむやすい広大な畑地があることから全国一の農産物がたくさん作られているのである。

地理的・歴史的分野に「溶け込ませた」 金融教育の実践

京都府
京都市立伏見中学校 奥村光太郎教諭